

日本の宇宙開発はどこへ

雪印乳業のトラブルは、日本社会の「たるみ」論議を加速した。原子力やロケットの事故で日本技術への「信頼」がゆらぎ、銀行やゼネコンの破綻が日本が誇った経済力のぜい弱さを露呈し、そして家庭レベルからの信頼の見本のような雪印ブランドの事故である。

中でもHII ロケットの開発のつまづき以降、宇宙開発事業団を中心とした宇宙開発へのバッシングは、激しいものがある。特に、政治筋からの圧力が厳しいと聞く。このままではせっかくここまで進んできた日本の宇宙技術が狭い枠に押し込められ、衰退を招く結果になりはしないかと恐れる。組織的にはいろいろ改善すべき点もあろうが、宇宙開発事業団を中心とした日本の宇宙開発は、戦後の空白からよくぞここまでキャッチアップしたものだ。その点をまず、評価すべきではないか。その上でフロンティア開発へと移行する過程で、難しい局面に至っている現状を考え、足らざるを補強して、今後の発展のための対応を検討する事が肝要だろう。

一方の宇宙科学も、タイミングの悪いMVの事故でこれにまき込まれてしまった。だが宇宙科学研究所を中心とした日本の宇宙科学は、少ない予算と人員で米欧に互し、よくここまで気を吐いてきたことを、何よりもまず高く評価されなければならない。成果への評価をきっちりしないで、失敗した時だけ叩くというのでは、日本社会はいつまで経っても欧米には追いつくまい。(ただそのためにも、科学者の側も社会への接点を格段に強化しなければならない)

気になるのは、科学や技術への近視眼的な対応である。宇宙への進出は、人類の長期的発展の道であり、100年単位で考えなければならないし、一方科学も技術も、試行錯誤と積み上げの上にはしか発展しない。表面化した様々なトラブルは、日本社会の成長過程の反映、ある意味では未熟さの現れであることを自覚し、貴重な授業料にしなければならない。日本の技術へのゆきすぎた「信頼」は、そうした実情を見過ごした過信でもあろう。

日本の宇宙開発はこの十年で、新たな時代に入った。アメリカの模倣と技術導入の時代を終え、ようやく自主開発の段階に入ったところで、生みの苦しみにさらされている。それは言い換えれば、ニーズや技術の創出の苦しみである。また宇宙科学は、自主開発の上に優れた科学的成果を上げつつも、飛翔体のサイズで行き詰まりつつある。ここで日本は、宇宙技術をゼロから積み上げてきた欧米諸国の莫大な試行錯誤と懊悩に敬意を表し、遅ればせとはいえその一端を担うことで、さらなる発展を遂げることができるだろうか。それとも、せっかくここまで来た貴重な宇宙の技術を永久に失ってゆくのか。私には、日本の宇宙開発・宇宙科学はいま、そんな瀬戸際に立たされているように見える。

今回の禍をいかに転じて福となすかという論調も、新聞雑誌に散見する。だが事態は、そうい

う方向には必ずしも運んでいないようだ。学術から開発・利用まで広く日本の宇宙開発政策を立案してきた宇宙開発委員会は、いわゆる行政改革・省庁合併に際して格下げになり、宇宙開発事業団のためだけの委員会となる。宇宙開発委員会がともかくも果たしてきた宇宙開発と宇宙科学を含めた全体的な審議の場をどうひきつぐのかは、いままったく考えられていないという、驚くべき事態になっている。日本はいつ、宇宙を国の重要政策課題からはずしてしまったのだろうか？ 来年1月の省庁合併を前に最近開かれた宇宙開発委員会の基本戦略部会（議事は完全に公開）で、そのことが大きな議論になった。出席された大島文部科学大臣（宇宙開発委員長）は、総合科学技術会議での宇宙の位置付けを鋭意検討することを、約束された。大いに期待はしたいが、果たしてどうか。

国立大学や大学共同利用機関の法人化問題と同様、日本の宇宙開発・宇宙科学も、政治と行政の大波に揉まれ、行方が分からない。これは、宇宙に関心を持つ私たち自身が直視し対応していくべき大きな課題だ。市民の目と併せ、長期的な視点を持つべきジャーナリズムにも、より大きな積極性を期待するや切である。

海部宣男（国立天文台）